〔特別講演要旨〕

歯科治療の問題点－米国のAIDS患者の訴え

ロマリンダ大学医学部微生物学講座
助教授　笠　　淳　一　先生

と　き：平成6年10月24日

現在ロマリンダ大学医学部骨代謝研究所に留学している本学歯学部口腔病理学講座中出講師を含め日本人の留学生などのお世話をしているJapan Clubの会長であるロマリンダ大学医学部微生物学講座助教授笠淳一先生が来校され，「歯科治療の問題点－米国のAIDS患者の訴え」という演題名で，歯科医にとって非常に重要である問題を大学院生，歯学部教員を対象に講演して頂きました（平成6年10月24日（月曜日）14：00～16：00図書館大会議室）。

既によく知られた事件であるが，患者であるキンバリー・バーガリスさんが2年前に受けた歯の治療でHIVに感染しAIDSを発症したとして訴えた事件（1991年）で，患者自身が連邦議会の公聴会で証言して全米の注目をあつめ，この事件を契機にアメリカでの歯科診療におけるHIV感染予防対策が考えられるようになりました。現在AIDSは日本でも次第に深刻になっている問題で，歯科診療においてもその予防対策が真剣に考えられなければなりません。

ほぼ同時期，1992年に笠先生は歯科用ハンドピースに関する研究をLancet（Lewis, D et al.: Cross-contamination potential with dental equipment Lancet 340 1252-1254, 1992）に共同発表した時に，アメリカの3大ネットワークの報道特集として大々にとりあげられました。その報道が行われる前は20％の歯科医がハンドピースの殺菌を，残り80％の歯科医がハンドピースの回りをアルコールで拭く程度だったのが、報道後（1993年）は96％の歯科医が殺菌を行うようになり，現在では（1994年）ではほぼ100％の歯科医が殺菌をおこなうようになったという報道後のデータ，先生の研究のデータおよび3大ネットワークにAIDSに関する歯科の予防に対する報道がなされたビデオをまじえ，歯科診療時の感染の可能性，感染防御対策などの重要性を講義して頂いた。

（文責：口腔病理学講座教授　賀来　　亨）